



この報告書は2008年11月に行われたMISIAのアフリカ視察レポートとして、Child Africaウェブサイトに掲載されたものです。レポートで使われているデータは2008年当時のものです。同事業は2010年5月にmufefが設立したのに伴い、これまでの任意プロジェクト「Child AFRICA」からmufefへ引き継がれ、運営されています。

これまでのChild AFRICAの活動をまとめたページはこちら→ <http://www.mufef.net/contents/childafrica.html>

“The warm heart of Africa”マラウイ

今回の視察で最初に訪れた「アフリカの温かい心」、フレンドリーなもてなしの国、マラウイの正式名称はマラウイ共和国 (Republic of Malawi)、チェワ語で「マラウイ」は炎、光を意味します。

アフリカ大地溝帯に位置し、マラウイ湖の西岸にある南北に細長い国で、南北の長さは900kmに及びます。北海道と九州を合わせたくらいの国土は、5分の一が湖や川などの水域となっています。北・北西部をタンザニア、東・南・南西部をモザンビーク、西部をザンビアの国境と接している、内陸国です。人口約1320万人、首都はリロングウェ。公用語はチェワ語と英語です。

国旗の黒はアフリカの人々を、日の出はアフリカ大陸の希望と自由の夜明けを、赤はマラウイの自由と独立の為に戦って死んだ人々の血、緑はマラウイの絶えることのない緑を意味しています。

マラウイもアフリカの多くの国と同様に、かつてはマラビ帝国として繁栄したものの、19世紀にはイギリス保護領ニヤサランド (Nyasaland、ニアサは湖の意) として植民地化された歴史を持ちます。1953年には現在のザンビア (北ローデシア)、ジンバブエ (南ローデシア)、マラウイ (中央ニヤサランド) をあわせたローデシア・ニヤサランド連邦 (イギリス領中央アフリカ連邦) が成立しますが、1962年に連邦内での自治権を獲得、翌63年に連邦離脱の権利が認められ、1964年にイギリスから独立しました。その後、バンダ大統領による独裁を経て、1993年に複数政党制へ移行、1994年に独立後初めての大統領・議会選挙を経てムルジ政権が生まれました。現在はムタリカ大統領によって統治されています。

国土の15%を占めるマラウイ湖の水深は最大700メートルで、チャンボをはじめとする500種以上の魚類が生息しています。その他、湖にはカワ



ウソ・ワニ・カバ・様々な色鮮やかな鳥も生息しており、マラウイ湖国立公園は、ユネスコの指定する世界遺産の一つになっています。

マラウイの主要産業は農業で、人口の85%が農業関連事業に従事してトウモロコシやタバコ、砂糖などを栽培しています。しかし近年では、干ばつによって収穫量が激減し、国連世界食糧計画 (WFP) による援助も受けています。

日本とマラウイの関係は、1971年に青年海外協力隊の派遣を開始したことに始まります。1988年には国際協力事業団 (JICA、現独立行政法人 国際協力機構) 事務所が設置されました。日本の援助は2006年までの累計で有償資金協力が331.49億円、無償資金協力が482.37億円 (2006年度は15.57億円)、技術協力実績は285.76億円 (2006年度は13.05億円) になります。青年海外協力隊の派遣数の累計は、シニアボランティアを含めると世界最多の1300人を超えます。1983年には青年海外協力隊で派遣されたOB・OGにより、日本マラウイ協会が設立されました。現在、マラウイには80名近い青年海外協力隊員が派遣されています。

マラウイの豊かな文化



マラウイの豊かな自然は、マラウイ湖だけではありません。エチオピアから続くアフリカ大地溝帯にあることから、各地で山がそびえ、変化に富む景色を提供しています。標高1800メートルになるデッサ (Dedza) では、素晴らしい景色を見ることが出来ます。

このデッサでは、名産の陶器を購入したり、青年海外協力隊員がマラウイ観光省と進めるマラウイのダンスショーを見ることが出来ます。

ンパレレ村のサオンバマンジャという集落で行われている試みで、村の

人々の間で選出された若者、女性、子どものグループや、グレアंकールという伝統的な踊りを観ることが出来ます。マラウイのダンスは周辺国からも人気があり、隣国タンザニアとのダンス交流も盛んといわれています。歌い手と楽器の奏者、そしてダンサーからなるユニットは、周りの声援を受けて、その踊りは一層激しさを増していきます。同地域ではダンスと土産物屋を展開して、観光収入を得ることを目指しています。

また、マラウイ湖周辺はリゾート地としても有名で、瀟洒なロッジに宿泊も可能です。マラウイ湖ではウォータースポーツを楽しむこともできるほか、マラウイ湖特有の生物や動植物の観察も出来ます。

マラウイの現実

マラウイは一見するとのどかな風景が広がり、豊かな生活に見えます。しかしマラウイの生活は、「目に見えない貧困」と表現するのが一番ふさわしいのかもしれない。国民総所得 (GNI) は31億5000万米ドル (2006年: 世銀) で、これを一人当たり換算すると、230米ドルになります。国連開発計画 (UNDP) が算定する、その国の人の生活状況や発展度合いを見る人間開発指数 (HDI) によると、マラウイは177か国中164位、世界最貧国の20カ国のうちの1カ国になります。ちなみにHDIの1位はアイスランド、日本は8位です。

人間開発指標: 成人識字率、総就学率、一人当たりのGDP、平均寿命から算出。ちなみにHDIで最も低いといわれる156位以下の国はすべてアフリカで占められる。セネガル(156)、エリトリア(157)、ナイジェリア(158)、タンザニア(159)、ギニア(160)、ルワンダ(161)、アンゴラ(162)、ベニン(163)、マラウイ(164)、ザンビア(165)、コートジボワール(166)、ブルンジ(167)、DRC(168)、エチオピア(169)、チャド(170)、中央アフリカ(171)、モザンビーク(172)、マリ(173)、ニジェール(174)、ギニアビサウ(175)、ブルキナファソ(176)、シエラレオネ(177)

	マラウイ	日本
国土面積(平方キロメートル)	118,000	377,907
人口(100万人)*1	12,3	127,7
国家予算(2005)	1,188億MK	821,829億円
ドナーからの援助(マラウイ) 公債(日本)	508億MK *2 (国家歳入の43.7%)	343,900億円 *3 (国家歳入の41.9%)
一人当たりGDP(2003,US\$)	156	33,718

*1: Human Development Report 2005, UNDP

*2: マラウイの国家予算

*3: 財務省ホームページ

貧困で引き起こされる保健と教育の課題

	マラウイ	日本
乳幼児死亡率(人/1,000人)	112	3
出生時平均余命	39,7	82,0
国家予算(2005)	1	201
10万人当たりの医師数	14.2	< 0.1

Human Development Report 2005, UNDP



人口の52%に当たる約686万人は1日0.32米ドル以下で生活しており、5分の1に当たる264万人は1日0.2米ドル以下で生活する、超貧困状態にあります。貧困状況にある18歳以下の子どもの数は、400万人に上ります。

こうしたマラウイのまずしさは、電化率が7%程度という低さや、国家予算の4割が日本をはじめとする先進国や国際機関からの援助に拠っていることにも表れています。

マラウイの厳しい貧困状況によって、特に深刻な影響を受けたのは保健と教育です。貧しい世帯の多くがコミュニケーション・輸送手段の発達していない地方に生活することから、必要な時に必要な医療・保健サービスを受けることができません。多くの医療施設が都市部にあることから、全人口の半数が、一番近い保健施設に行くのに歩いて80分以上かかる状況にあります。マラウイの平均寿命は48歳。日本の82歳と大きな差が広がっています。

さらに、マラリアやHIV/エイズ、エイズが原因とされる結核などの感染症が蔓延しています。子どもの死亡原因の多くにマラリアや下痢、エイズ関連疾患が挙げられています。また、栄養不足も深刻な問題となっており、ユニセフの推定では、46%の子どものが栄養失調による発育不全であり、21%が低体重児とされています。

1999年にマラウイ保健人口省は、国家保健計画を策定し、すべてのマラウイ国民を対象に、特に罹患率の高い疾病に係る医療サービスを無料で提供する「必須医療保健パッケージ」を打ち出し、性感染症、栄養欠乏症、マラリア対策、家族計画を含む妊産婦と新生児のケアなどをサービス提供を始めました。しかし公的医療施設における医療従事者の人員不足、不十分な施設環境、必要な医療機器・物品不足や政府の行政能力不足などにより、十分なケアが行われていないのが現状です。

また、貧困は、教育の現場でも深刻な課題を引き起こしています。

国連が2000年に定めたミレニアム開発目標 (MDGs) では、第2ゴールに、初等教育の完全普及の達成を挙げています。

マラウイでは8年制の小学校と4年制の中等学校の8-4年制がとられており、6歳から13歳までの子どものうち、95%が小学校に就学しています。しかし就学する約85万人のうち、卒業するのは19.6%に過ぎません(男子の卒業率は22.3%、女子は17%)。ドロップアウト率の高い原因は若年結婚や若い年齢での妊娠、自宅から学校までの距離の遠さや不十分な学校の施設などが挙げられます。特に学校では男女別のトイレがなかったり、井戸がないために飲み物が飲めず、子どもたちが学校に通いたくなるインセンティブが失われることとなります。

また、家庭が貧しいために家族を助けて働かざるを得ないことから、学校に通うことをやめてしまう子どももいます。マラウイで深刻なエイズ問題も、子どもの就学を妨げています。さらに、初等教育は無料ではあるものの義務教育ではないことも、初等教育の就学率を下げる原因です。教育の重要性を親が理解していないことや、授業は無料でも通学に必要な制服や教科書の費用が捻出できずに、通学を断念することもあります。

また、初等教育修了者のうち、中等学校に進むものはそのうち37.5%にあたる約6万人にしか過ぎません(2007年)。中学校の数が少ないために、自宅から通うことが困難であることから、進学率は低いのが現状です。中等教育課程に進んだ者のうち、約8割が卒業します。しかし大学に進学する人は、わずか6500名、初等教育1年から見たらわずか1%でしかありません。

こうした状況から、マラウイの識字率は56%(男性72%、女性42%)となります。識字率の低さは、かれらがより高収入の職に就くチャンスを奪い、結果として貧困から抜け出すチャンスを奪っているのです。



	マラウイ	日本
初等教育純就職率(2004,%)	80.9 *1	100.0 *2
成人識字率(%)	64.1 *2	- *2
初等総教員数(2004,人)	43,952 *1	414,908 *3
初等教員一人当たりの生徒数(人)	72 *1	17 *3

*1: Education Management and Information System

*2: Human Development Report 2005, UNDP

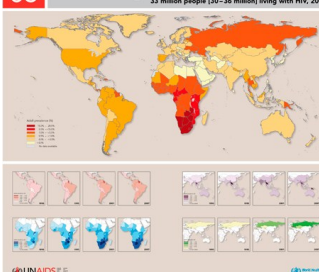
*3: 文部科学省ホームページ

エリナ・ステファノとの出会い

マラウイをはじめとする南部アフリカで現在深刻な問題の一つに、HIV/エイズの感染があります。

国連合同エイズ計画 (UNAIDS) の報告によれば、2007年末に世界のHIV感染者数(子どもを含む)は3,300万人(成人感染率0.8%)、2007年中の新たな感染者数は270万人、同年のエイズ死者数は200万人に上ります。地域別の感染者数ではサハラ以南アフリカが2,200万人と、世界の3分の2を占めており、第3位の南アジア・東南アジアの420万人を大きく上回っています。

08 A global view of HIV infection



特にスワジランドをはじめとするアフリカ南部での感染状況は深刻で、平均寿命の低下も引き起こしています。マラウイでも成人感染率は世界でも9位に位置しており、その問題は深刻です。

エイズは平均寿命の低下につながるばかりではありません。いわゆるエイズ孤児と呼

ばれる、エイズによって両親または片親を失う子どもを生み出します。これらの子どもは孤児として、親戚やコミュニティによって世話を受けます。

私たちが今回出会った、エリナは、12歳。両親をエイズ関連疾患で失いました。現在、お祖母さんと二人で生活していますが、生活は楽ではありません。



左より:MISIA,エリナ,エリナの祖母,チャボンバ先生

マラウイでは、エリナのように両親を失った子どもが祖父父母と暮らすケースが多くあります。親を失ったために、都市での生活から、祖父父母が暮らす村に戻る子どもは、生活環境の変化についていけなかったり、親を失った悲しみから抜け出す方法を知らないこともあります。

エリナは、学校が終わってから、コンソル・ホームズに通い、他の子どもたちと交流することで、さびしさから抜け出すことができるようになりました。もちろん、まだ両親のことを思い出すと悲しくなります。しかしそれでも、一人ぼっちのときに感じていた孤独だけではない日々を過ごすことができるようになっていきます。

コンソル・ホームズ・オルファン・ケア



今回、マラウイでは、JICAの協力を得て、いくつかのテーマに沿って訪問しました。そのうちの 하나가子どもと、エイズ、マラリアなど感染症の問題です。

首都リロングウェから車で40分、ナミテテ(Namitete)という地域に、マラウイ現地のNGO「Consol Homes Orphan Care」があります。コンソル・ホームズは、2000年にチャボンバ夫妻によって設立されたHIV/エイズ陽性者へのホームベースケアとHIA/エイズなどで片親または両親を失った子どもへの支援を展開しています。

現在76のセンターがナミテテとンチュウ地区を中心に点在し、約600名の現地ボランティアが協力して7歳から18歳の約14,000名の子どもへの支援を行っています。

ホームベースケアとあるように、コンソル・ホームズはエイズ孤児に宿泊施設や衣食住を提供する場ではなく、子どもたちが学校の合間に通って補習に通ったり、遊んだりする場を提供します。マラウイでは国全体が貧しいために、子どもを全面的にサポートする「孤児院」の設置は奨励されておらず、親戚や残された家族で孤児たちの面倒を見る昔ながらのサポート体制が推奨されています。

私たちは、子どもたちやボランティアの方々の歌声で迎えられました。歌は歓迎の歌、コンソル・ホームズの歌、と多岐にわたります。また、子どもたちには「手を洗おう」といった衛生教育の歌もありました。

コンソル・ホームズでは、子どもに対して1日一食を提供し、少なくとも「1日1食は食べられる」ようにしています。そうすることで、子どもたちの栄養改善と、コンソル・ホームズに定期的に通うインセンティブにつながる事が期待されます。

私たちは、設立者であるマイチャボンバさん(マイ

はチェワ語で「Mrs.」の意味)から話を聞きました。

2000年にエイズ孤児が多くいる中で、親を亡くし悲しみにくれる子どもたちの心のケアをしたいと、マイチャボンバさんは一本の木の下から活動を始めます。コミュニティの人々の協力を得て始めた活動は、やがてカナダ政府や民間財団の賛同と資金援助を得て、拡大、2007年には現在の立派なセンターができました。運営は、UNICEF、マラウイ政府およびトムハンター等多数のドナーから資金・物品援助を受け実施している。また、海外からのボランティアとして米国平和部隊、VSOを受け入れています。青年海外協力隊は2004年から同センターに派遣され現在、幼児教育、村落開発普及員、野菜、青少年活動の4名の職種の隊員が活動しています。

青年海外協力隊の方は、コンソル・ホームズを拠点に、各支部を回って子どもが健やかに育つために必要なスポーツやゲームの指導、幼児教育の指導や、栄養や土壌に配慮した野菜作りを教えています。マラウイでは、教育の現場でスポーツやレクリエーションの重要性がそこまで認知されていない状況にありますが、協力隊員の活動を通じて、子どもたちにスポーツや音楽の楽しさ、楽しさを通じて学ぶことの重要性を認知できるようにしています。

また、ボランティアの善意で行われていた運営も、スタッフへの人件費の支払いもできるようになったのはごく最近ということで、マイチャボンバさんも自身の生活費から捻出しないで済むようになったのはここ数年ということでした。

活動中の青年海外協力隊員

- ⇒ 幼児教育隊員: 孤児を対象にした幼児教育。また村でのボランティア指導も実施
- ⇒ 村落開発普及員: 活動資金のための洋服販売やHIV感染者や青少年を対象に料理教室を実施
- ⇒ 野菜隊員: 野菜作りの指導
- ⇒ 青少年活動隊員: 施設に通う若者を集めて、ゲーム・劇などを教える。



悲しんでいる子どもたちを助けて



私たちは、最後に、なぜこのような活動を始めたのか、マイチャボンバさんに聞きました。「ひとりでも亡くなると悲しいのに、それが周りにたくさん起きました。悲しんでいる子どもたちを助けて、活動を始めたんです」

「愛は売るものでも、買うものでもありません。愛はただそこにあるんです」

Love is Free.

彼女のたくましさ、そしてコミュニティからの熱い信頼の源がここにあります。

また、今回はコンソル・ホームズの支部のひとつ、サンガ・センターを訪問しました。サンガ・センターには約60名の子どもが登録しており、幼稚園や子どものレクリエーションを行っています。私たちは、子どもたちへのポリッジと呼ばれる小麦粉と砂糖・塩でつくるお粥のような食事の炊き出しと配布に参加。子どもの手

洗いからご飯の配給と続く中で、衛生の重要性と一食の提供が持つ意味を考えることができました。

また、コンソル・ホームズのみなさんには、最後に私たちから何かを送りたいと、サッカーボール31個を寄付しました。このボールは、各支部に配られ、子どもたちの遊びに役立てられます。ボールを受け取って、センターに集まる子どもたちはボールを使って投げたり、蹴ったり。とてもうれしい光景でした。



一村一品運動(One Village, One Product)



マラウイ全体で大きな課題となる貧困問題。その解決に必要なのは、援助を与え続けることではなく、彼ら自身が収入を得る手段を持つこと。今回はそのひとつの試みとして、JICAが進める、一村一品運動も視察しました。

マラウイでは、一村一品運動の現場のひとつ、ミトウンドウで、落花生油づくりやキャッサバを使ったパン工場も視察しました。この一村一品運動は、もともと大分県で提唱、進められた、一村一品運動をヒントに、地域おこし、村おこし運動になります。一村一品運動という一つの村で一つの商品？と思われそうですが、地域の顔、地域の誇りとなるものを掘り起こし、あるいはつくり出して、全国や世界に通用するものに育てていこうとする、地域活性化のための運動を意味します。1979年に平松守彦・大分県知事が、提唱したのが始まりで、翌1980年には大分県の全市町村で開始されました。

2003年から開始され、国家プログラムとして進められる。JICAマラウイ事務所は、2003年度から、一村一品パイロット事業として9つの一村一品プロジェクトを支援し、2005年度からは技術協力プロジェクトとして「マラウイ一村一品運動のための制度構築と人材育成プロジェクト」を開始しました。小規模農民グループを対象に、マラウイ農林水産物を利用した加工技術の普及、品質改善、マーケティング能力向上を図り、マラウイ産品の付加価値向上を目指す。パームオイルソーブやバオバブのジャムや油、キャッサバパウダーの生産を行っています。

マラウイ各地で、希望者・グループがアイデアを出し、審査を経て通った企画に対してJICAが少額の支援を行うもので、ミトウンドウでは現地で採れるキャッサバの粉を使ったパン工場と落花生油づくりのグループを見学しました。お金を得ることで、ビジネスを長期にわたって展開したり、得た収入でより良い生活作りも可能になります。

ナイロビ再訪:マゴソ・スクールへ



そして、私たちが向かったのは、東アフリカに位置するケニアの首都ナイロビです。ケニアは2007年4月の訪問に続く2回目の訪問となりました。今回ケニアの訪問の目的は、CHILD AFRICA発足の契機となった、キベラスラムのマゴソ・スクールの訪問と早川さんやリリアンといった、スクールの運営されている方との再会、そして前回の訪問で出会ったエミテワとの再会でした。

マラウイからケニアに入ると、ナイロビの都会ぶりが目立ちます。数字だけ見ると、一人当たりGNIは580米ドル(2006年)、人間開発指数は177か国中148位にあります。また、行きかう人や車の量もマラウイとは比較になりません。

その一方で、ケニアも決して豊かな国ではありません。平均寿命が53歳(2006年、世銀)、5歳以下の幼児の栄養欠乏率は18%(2000年、世銀)、15-49歳のHIV罹患率は7.8%(2007年)に上ります。こうした数字は、ケニアが決して豊かではない現状を示しています。豊かに成長する一部の人や企業がいる一方で、豊かさを享受できない人の数は多いのが現状です。

マラウイでは見ることができなかった高層ビル群を抜けると、ナイロビ市内にあるアフリカ最大級のスラム「キベラスラム」に到着します。ナイロビはもともと植民地時代に作られた人工都市ですが、その人工都市に生まれたキベラスラムは、人口80~100万人といわれ、農村部で生活することができなかった人々の流入によって、増大しました。しかしキベラスラムでも豊かな生活ができるわけではなく、人々はその日暮しを強いられています。豊かなナイロビの姿と、影の部分のスラムの人々。アフリカで拡大する貧富格差という現実を私たちに示すものでもあります。

今回私たちは、早川千晶さんがキベラスラムの住人たちと運営する「マゴソ・スクール」を再訪しました。「こどもたちに勉強する機会を与えた

い。」そんな強い意志をもったケベラの住人リリアンさんが長屋の一角で寺子屋をはじめたのがきっかけで生まれた学校です。マゴソ・スクールまでは徒歩で向かいます。家と家の間の道は未整備で、ときに前夜に降った雨が川のように流れていました。

マゴソ・スクールでは子どもたちが歌で迎えてくれます。歌も、子どもたちの服も、マラウイとは異なるのが印象的でした。アフリカと一口に言っても、国による多様性があることを、子どもたちの歌だけで感じることが出来ます。

訪問して驚いたのは、マゴソ・スクールが2階建てになっていたこと。建設には、以前MISIARTHで販売した「MISIA 2008 Calendar for Kibera Slums」の収益の寄付も活用されたとのことでした。アフリカと日本のつながりの中から、着実に子どもたちの支援につながる流れがあります。

昨年出会ったエミテワは、2008年1月に大統領選をきっかけに起きた騒乱や、お父さんの病気をきっかけに、現在ナイロビから500キロ離れたモンバサに住んでいます。今回は、モンバサからわざわざやってきました。エミテワも今年は中学受験。将来に向かって勉学に励んでいました。

今回、訪問をきっかけに、子どもたちのために何ができるのだろうか。私たちは、今回はマゴソ・スクールの子どもたちに描いてもらった絵を使ってグッズの制作を行うことにしました。子どもたちの絵をモチーフに制作するグッズの売り上げを、マゴソ・スクールに寄付することで、子どもたちの生活支援に充てられます。



アフリカ訪問を終えて



アフリカ訪問を終えて、残されたのは、私たちに何ができるのか、という問いかけでした。今回見た貧しさという現実、子どもをとりまく現状は、決して楽しいものではありません。

他方で、アフリカは私たちに豊かな自然や文化、人々の笑顔に込められた強さや、より良い生活を求

める生きる力を示してもらいました。自分たちの国や生活、歴史への誇りとその強さは、日本にいる私たちへの力強いメッセージを教えてください。

私たちは、今後も彼らと「つながる」ことで、日本からできることを考えていきたいと思えます。